

---

# ペルーにおける「国民」理念の形成

## 1920年代のホセ・カルロス・マリアテギの場合

Formation of the Ideas of the Nation in Peru :  
The Case of José Carlos Mariátegui in the 1920s

小倉 英敬\*

OGURA Hidetaka

---

キーワード：ペルー思想史，ネーション，ナショナリティ，マリアテギ，ポストモダン

KEY WORDS: history of the Peruvian thoughts, nation, nationality, Mariátegui, postmodern

El Perú es una nación multiétnica compuesta por 59 grupos étnicos. Después de la derrota en la Guerra del Pacífico (1879-1883), muchos intelectuales peruanos como Manuel González Prada, Francisco García Calderón, José de la Riva Agüero y Osma, trataron de elaborar esquemas sobre cómo debería formarse la nación peruana. El intelectual que ha trabajado más sobre este tema fue José Carlos Mariátegui, quien escribió en la década de 1920 varios artículos, libros y hasta informes que fueron presentados a la Tercera Internacional.

Mariátegui decía que la peruanidad, que es la nacionalidad peruana estaba en formación y había que situar como cimiento de la nueva nacionalidad peruana a los indígenas que estaban siempre marginados desde la conquista de los españoles.

A pesar del planteamiento de Mariátegui, la nacionalidad peruana aún no está formada hasta ahora, debido a la falta de integración de los indígenas serranos y selváticos, otros grupos minoritarios y los cholos. Sin embargo, Mariátegui planteó no sólo integración, sino fusión que se logra a base de convivencia o coexistencia de los varios grupos étnicos y sus concepciones de valores diferenciados.

Por lo tanto, el alcance de la idea de Mariátegui fue más allá de la integración, y apuntaba la convivencia o coexistencia de valores multiculturales de que se habla mucho en víspera de la época postmoderna.

El autor intenta, a través de revisión de las ideas de Mariátegui plantear la vigencia de sus pensamientos dentro del proceso de globalización que está avanzando día y día, porque dentro de ese proceso se requiere la convivencia y coexistencia de los distintos valores culturales para reconocer cada elemento de ellos y no excluir ninguno.

---

\* 国際基督教大学非常勤講師 Part-time Instructor of the International Christian University

## はじめに

ペルーは59のエスニック集団から構成されている。1990年に生じたフジモリ大統領の選出という近年の現象を除けば、これまでペルー社会の中で非白人系の人々の大部分は、政治的、経済的、社会的に周縁に位置づけられ、既成支配階層から排除されてきた。このような国民形成の問題は、太平洋戦争(1879-83年)における敗北を契機として、ゴンサレス・プラダ(Manuel González Prada)、ガルシア・カルデロン(Francisco García Calderón)、リバ＝アグエーロ(José de la Riva Agüero y Osma)のような思想家によって断片的に取り上げられてきたが、それをナショナル・アイデンティティ形成の視角から本格的に思索したペルーの思想家が、1920年代に活躍したマリアテギ(José Carlos Mariátegui La Chira, 1894-1930)である。

マリアテギは、1920年代に活躍したラテンアメリカ最大のマルクス主義思想家と呼ばれる。身体障害のために、実践家としては十分に活躍できず、ペルー社会党(PSP)やペルー労働総同盟(CGTP)の創立者とはなかったが、社会主義運動の指導者としてよりも、理論家として評価される。コミンテルン(共産主義インターナショナル)はPSPを共産党に改編すべきと勧告したが、マリアテギはラテンアメリカ、特にペルーの特殊性から見て、ペルーの社会主義運動において必要なのは、前衛党ではなく、大衆党であると主張して、PSPの共産党への改編を拒否した。マリアテギの社会主義論は、インドのM. N. ロイヤ、ソ連の سلطان・ガリエフ等とともに非ヨーロッパ

世界におけるマルクス主義思想として注目されている。

マリアテギの思想に関する本格的な研究が開始されたのは、ペルー人研究者及び外国人研究者を含めて、1970年半ばから1980年代初頭の期間であった。メセグール(Diego Meseguer)の『ホセ・カルロス・マリアテギとその革命的思想』[Meseguer 1974]、ヘルマナ(César Germaná)の『アヤ＝マリアテギ論争：改革か革命か』[Germaná 1977]、アルゼンチン人研究者アリコー(José Aricó)の『マリアテギとラテンアメリカ・マルクス主義の起源』[Aricó 1978]、フロレス・ガリンド(Alberto Flores Galindo)の『マリアテギの末期』[Flores Galindo 1980]、キハーノ(Anibal Quijano)の『再会と議論：マリアテギへの序章』[Quijano 1981]が、マリアテギ研究における新時代の先駆的な研究成果として挙げうるだろう。

この時期に、マリアテギ研究において1930年のマリアテギの死後に封印されてきたタブーが払拭された。タブーとは、マリアテギが結成したPSPが、マリアテギの死の直後にペルー共産党に改名の上で再編され、コミンテルンの国際路線に沿った方向性を採用して以来、強いられてきた理論的拘束であった。コミンテルンは、マリアテギが前衛党論を否定して大衆党論を採用し、また民族自決に基づくケチュア＝アイマラ共和国の建設に反対してあらゆる人種的諸要素を結集した統合ペルーの建設を主張したため、彼に小ブル急進主義とのレッテルを張り\*<sup>1</sup>、その後はポピュリズムの一種に分類した\*<sup>2</sup>。その後、1960年にマリアテギの主要著作である『ペルーの現実

解釈のための七試論』(以下、『七試論』)のロシア語訳が出版されたことで、タブーが解禁された。しかし、マリアテギ研究が本格化されるまでには更に十数年を要した。

1970年代にマリアテギ研究の新時代が始まり、それまでの上記のような評価がマリアテギの思想の神髄を表わしていないことが明らかにされてきた。マリアテギの思想の特徴は、「全体性」と「共生」に特徴づけられる思想であり、ポストモダンへの方向性をも含む、問題提起性の強い刺激的思想であることが徐々に明らかにされてきた。

「全体性」の思想とは、単に人々の肉体的、経済的状態の悪化のみを変革の対象とするのではなく、社会的、文化的状況の全体を主題とするとの視点である。換言する

なら、社会変革の対象を、政治制度や経済制度のみでなく、社会的、文化的状況とそれに規定される個人の意識や日常生活にも及ぼすとの視点を有する思想である。このような、社会的、文化的状況とそれに規定される個人の意識や日常生活をも変革の前提条件とした故に、マリアテギの思想は、当時のコミンテルンの主流派に代表されるマルクス主義に比し、「精神主義」あるいは「主意主義」的な傾向を特徴としている。マリアテギの、この「精神主義」、「主意主義」の傾向については、1920年代におけるヨーロッパ・マルクス主義の「主意主義」を代表するルカーチ (Georg Lukács)、コルシュ (Karl Korsch)、グラムシ (Antonio Gramsci) らとの類似性や\*<sup>3</sup>、ソレル (Georges Sorel) らからの影響が指摘されて

\* 1 マリアテギらが1928年10月に結成した PSP とコミンテルンとの間に摩擦を生じたのは1929年6月にブエノス・アイレスで開催された第1回ラテンアメリカ共産主義者会議においてであった。同会議では、主に PSP の大衆党的な組織論と先住民問題に対する姿勢が批判された。PSP の党論に関する批判には、第一にコミンテルンへの加盟条件である党名変更の問題に加えて、1928年8-9月に開催されたコミンテルン第6回大会で採択された『植民地及び半植民地諸国の革命運動に関するテーゼ』の中で、ラテンアメリカには「労働者・農民党を組織することは得策ではなく、共産党は決してその組織を二つの階級の融合に基づいて建設してはならない」と決議されたことが影響した [いいだ 1980: 177]。第二に、クスコの共産主義者グループが1929年2月に結成され、彼らがブエノス・アイレスに設置されたコミンテルン南米書記局と直接に接触するとともに、同年10月にはコミンテルン支部としてのペルー共産党結党クスコ共産主義細胞を結成して PSP を批判していたことも大きな要因となった。コミンテルンはクスコ共産主義細胞を支持し、PSP に対する批判を強めた。

他方、先住民問題に関しては、コミンテルン第6回大会で採択された『コミンテルン綱領』の中に表現された「人種を問わずすべての民族の完全自決権、すなわち、政治的分離にまで進むことの承認」との言説 [Degras 1977: 450] を援用して、先住民の自決権を土地問題の解決よりも優先させることが求められた [Martínez de la Torre 1949: 468]。

\* 2 ここでいう「ポピュリズム」とは、ラテンアメリカを初めとして国際政治上で見られたカルデナス政権 (メキシコ)、ヴァルガス政権 (ブラジル)、ペロン政権 (アルゼンチン) 等を典型とした、階級同盟的で指導者のカリスマ的性格とデマゴギーに基づいて階級協調的な性格を有する政治運動あるいは政治形態ではなく、ロシア革命前の農民共同体の集産主義的な習慣を重視して、農民共同体に基づく農民運動の社会主義への志向性を強調する「ポピュリズム」である [Miroshkevsky 1942: 5]。ミロシェフスキーは、マリアテギはイデオロギー的に混乱しており、その思想は「ペルーに適用されたポピュリズムの特殊な変形である小ブル的な社会主義の思想である。……その視点はプロレタリア社会主義とは無縁である」と論じた [ibid.: 29]。

\* 3 マリアテギの思想と、グラムシ、ルカーチ、コルシュの思想との類似性に関して最も早く指摘したのは、グラムシについてはイタリア人研究者のメリス [Meris 1967] であり、ルカーチ及びコルシュについてはアルゼンチン人研究者のボサダ [Posada 1968] である。マリアテギの思想と三者の思想については、近年の成果ではフロレス・ガリンドの晩年の論稿 [Flores Galindo 1987] が示唆に富む。しかし、いずれも類似性の指摘にとどまっており、理論的な比較検討は国際的にもまだ十分に行われていないのが実情である。

いる\*4。

他方、「共生」の思想とは、文化や価値観の多様性を認めようとする多元主義の思想である。このマリアテギの「共生」の思想が最もよく現われているのが、国民(nación)理念に関して執筆した一連の論稿である\*5。マリアテギが、ペルーの国民(あるいは民族)の問題に関して執筆し始めたのは、1924年5月の右脚切断手術後の、同年10月31日付『ムンディアル』誌のコラム欄「ペルーをペルー化しよう(Peruanicemos al Perú)」に「懐古主義と未来主義」と題する記事を掲載してからである。その後、断続的に『ムンディアル』誌のこのコラム欄や、1926年9月に創刊した『アマウタ』誌上に関連論説を掲載した。マリアテギのナショナルな問題への関心は、1928年11月に出版された『七試論』と、1929年6月にブエノス・アイレスにて開催

された第1回ラテンアメリカ共産主義者会議に提出された『ラテンアメリカにおける人種の問題』(以下、『人種の問題』)に集大成された。

ペルーにおいては、1950年代より本格化した山岳部農村からの国内移動を背景として、都市部に移動した先住民層及び先住民色の濃いメスティソ層が「チョロ化」し、更にペルー社会全体の「チョロ化」現象が生じた\*6。そして、一部には「ペルーは文化的にはチョロの国である」との評価も生まれるに至っている[Franco 1991: 37]。本稿は、マリアテギが上記の一連の論説や『七試論』及び『人種の問題』において展開した「国民」の理念を整理し、それが「チョロ化」した現代のペルー、及びグローバル化が進展している現代社会において有する意味を再考しようとするものである。

\* 4 マリアテギにおけるソレルの影響は、1970年にフランス人研究者のパリ(Robert Paris)が1970年7月に“APORTES”誌第17号に発表した論文『マリアテギのマルクス主義』の中で先駆的に言及した[Paris 1978: 119-144]。その後、1971年10月の同誌第22号にビジャベルデ(Luis Villaverde Alcalá-Galiano)が『マリアテギのソレル主義』を掲載して、パリの指摘を更に誇張してマリアテギをソレル主義の系譜に位置づけた。他方、フォルグはソレルの影響を受けたマリアテギの思想を、フランスのジョレスの思想との類似性において論じている[Forgues 1995: 203-225]。なお、ヘルマナはマリアテギにおけるソレルの影響の大きさを認めつつも、「神話」の強調についてはソレルを介してはいるが、その起源はベルグソンにあると指摘している[Germaná 1995: 173]。

\* 5 マリアテギが使用している「ネーション(スペイン語nación)」の訳語については、マリアテギが国家と「ネーション」を明確に区別した上で「国民」あるいは「民族」を表現する用語として使用していること、及びマリアテギの著作においては大半の場合に「民族」よりも「国民」と訳すことが適切と判断されることから、「民族解放」など「民族」と訳す方が適切と考えられる場合を除き「国民」と訳出した。この場合の、「国民」と「民族」の区別については、単数の(あるいは複数の)エスニック集団が民族を形成し、この民族を主体とした国民国家を形成した時点で、民族は国民に転化するものとする。なお、「ナショナリティー(スペイン語 nacionalidad)」については、民族形成の機軸になる属性であるとの観点から「民族性」と訳出した。

\* 6 「チョロ(Cholo)」という言葉は植民地時代には混血底辺層に対する蔑称として使用された。しかし現在では、1940-50年代に加速化したアンデス地域から都市部へ国内移動したアンデス農村社会の出身者及びその2世以下の人々で、アンデス農村部の先住民文化と都市部のクリオーリオ文化の双方を基盤としつつも、自立的な文化(チョロ文化あるいはチチャ文化と称される)を形成してきた人々をさして用いられている。そして、「チョロ化」とは社会の大衆的側面をこれらの人々が占めてゆく現象である。「チョロ化(cholificación)」現象については、ペルーはすでに文化的にはチョロの国であると主張する研究者がいる一方で、「チョロ化」はアンデス農村出身者が都市部でクリオーリオ化してゆく過渡的な段階を反映しているにすぎないと主張する研究者も存在する[小倉1996: 53-54]。

なお、最後に付言すれば、本稿はマリアテギの「国民（あるいは民族）」概念を論じるものではなく、マリアテギがペルーの「国民」はどうあるべきかを論じた「理念」を扱うものである。第I章では近年のマリアテギ研究における「国民」問題に関する議論の方向性をまとめ、第II章ではマリアテギのペルーの「国民」理念を整理し、第III章ではペルーを構成する個々の人種的要素に対するマリアテギの見方を概括した上で、第IV章ではマリアテギのインディヘニスム論を再考する。そしてこれらの検証を踏まえて、マリアテギが示したペルーの「国民」に関する理念が共生・共存を目指すものであることを明らかにし、このような理念が有する現代的意味を探ってみた。

## I. マリアテギ研究における「国民」問題

前述の通り、1970年代末にマリアテギ研究の新時代が始まったものの、マリアテギの「国民」問題観に関する研究は遅々として進まなかった。その理由は、第一にマリアテギ研究が主にマルクス主義の立場に立つ研究者によって行われたが、マルクス主義にとって「国民（あるいは民族）」の問題は、階級や国家との関連を整合的に論じられてこなかった一種の「弱点」であったからである。

マルクス主義における「民族」問題の議論は、1910年代にオーストリア社会民主党のバウアー (Otto Bauer) やレンナー (Karl Lenner) の所説に対する批判としてレーニンやスターリンによって行われ、特にスターリンが1913年1月に執筆した『マルクス主義と民族問題』が原典とされ

てきた。スターリンは「民族 (ナーツィヤ)」を、言語、地域、経済生活、及び心理状態の共通性という特徴がすべて同時に存在するものであると定義した。このスターリンの「民族」論は、ヨーロッパ周辺、特に東欧を対象としたものであり、アジア、アフリカやラテンアメリカを視野に入れていないという時代的制約に縛られたものであった。日本においても、このようなスターリンの「民族」論が再検討の対象にされ始めたのは、ようやく1970年代に入ってからであった。

ペルーにおいては、マリアテギ研究の進展が1970年代の社会主義運動の高揚と相俟っていたため、その関心は社会主義運動の理論的必要性に起因する先住民問題、土地問題、労農同盟論、統一戦線論、大衆論等の実践的な側面に集中した。その後ようやく1980年代後半より、研究対象分野が多岐多様化し、国民形成の問題に関する議論が進展したのもこの時期であった。しかし、問題の重要性に比べれば必ずしも研究の量は多くない。この側面を扱った主な研究者は、ペルーではフロレス・ガリンド [Flores Galindo 1979, 1987], フランコ [Franco 1980], ヌヘント [Nugent 1987], モントヤ [Montoya 1990], キハーノ [Quijano 1993], マンリケ [Manrique 1995], ヘルマナ [Germaná 1995], タピア [Tapia 1995], フランスのフォルグ [Forgues 1994, 1995] である。

これらの研究者の議論を逐次要約することは避け、ここでは全体的な議論の方向性を指摘しておきたい。明白なことは、いずれの研究者においてもマリアテギの時代にはペルーの民族性あるいは国民の形成は終

了していなかったとの認識があることである。その認識から出発して、マリアテギが民族性の形成は社会主義革命の中で達成されると論じたことを、1989年以後のソ連・東欧社会主義圏の解体後の時代に再考している。そして、マリアテギが主張した社会主義とは単に生産手段の社会化ではなく、国民の意識変革を通じた連帯性の確立であると社会主義の概念の拡大を図り、その視点からマリアテギが主張した社会主義の中での民族性あるいは国民の形成は実現されるとし、マリアテギの思想の有効性を主張している。

こうした研究の過程で、マリアテギの用語の使用法についても種々の事実が指摘されてきた。例えば、(i)マリアテギが「ペルーの民族性は形成の途次にある」とは述べたものの、ペルーの国民が形成の途次にあるとは述べていないこと、(ii)マリアテギが「エスニティ」と「人種」を現代とは逆の意味で使用していること、(iii)マリアテギは「民族問題」との表現を用いていないこと等々である。

## II. マリアテギの「国民」論

### (1) 「国民」の問題

私見の限りでは、マリアテギは「国民国家(ネーション・ステイト: estado-nación)」の用語は用いていない。しかし、国家(estado)と国民(nación)は厳密に区別して使用している。

モントヤは、マリアテギが「国民」の問題に関して、「国民」と「民族性(naciona-

lidad)」の二つの用語を明確に区別して使用していると指摘している [Montoya 1990: 51]。モントヤの指摘はマリアテギの著作に基づいた事実であるが、この点に関して、マリアテギ研究者の間でも未だ十分な認識が確立されているとは言い難い\*7。では、マリアテギは「国民」と「民族性」の用語を如何に区別して使用しているか。おそらく、この点を明らかにすることが、同時にマリアテギの「国民」理念を解明してゆく糸口になると思われる。

マリアテギは、「国民(あるいは民族)」という用語を使用してはいるものの、その概念に関して、明確な定義を示していない。例えば1925年11月27日付『ムンディアル』誌上のコラム記事「政治的イデオロギーにおけるナショナリズムと前衛主義」において、「特定の歴史段階においては、民族(nación)という理念は自由の精神を具現したものとなりえる。民族の理念がすでに古ぼけてしまったヨーロッパでも、民族の理念が発生し誕生した時には、十分革命的なものであった。そして現在では、外国の帝国主義に搾取され、民族の解放のため戦っているすべての人民のなかで、民族の理念は革命的意味を堅持している」と述べ、特定の歴史段階においては、民族の理念は革命的意味をもちうると論じた。この記述から、マリアテギは、前述の通り、明確な「国民(あるいは民族)」の概念の定義を示したことはなかったものの、それらの概念はそもそも近代ヨーロッパに発生したものであるとの事実を認識していたこと、及

\* 7 たとえば、ロシア人研究者であるゴンチャロヴァは、「マリアテギは(中略)先住民を形成途上にあるペルーの民族の土台に見る」などの表現を行っている [Goncharova 1995: 18,149]。

び、現在においても民族解放のために戦っている人々の間では民族の理念は革命的意味を持っているとの見解を持っていたことが理解される。1927年3月11日付『ムンディアル』誌に「インディヘニスモ論争」の関連で掲載した論稿においても、「これらの諸国民（筆者注：政治的、あるいは経済的な植民地諸国）において、民族の理念はその軌道を完遂していないし、歴史的使命は枯渇していない」と述べている [Maríategui 1975a: 221]。

次にマリアテギは、1927年12月2日付同誌のコラム記事「ナショナルな伝統」において、「伝統主義は、国民を、クリオーリョとメスティソだけに限定し矮小化した。（中略）民族的な伝統は、インカイスモを再統合することによって拡充した\*<sup>8</sup>。しかし、それを再統合したからといって、国民としてのわれわれの存在や個性のなかに強固に組み込まれてきた他の諸要因、価値規準がまったく無効になるわけではない」 [マリアテギ 1999: 233-235] と述べ、ペルーの「国民」が既に存在していると述べたものと判断しうる表現を行っている。

マリアテギは、既に存在する国民の構成はクリオーリョとメスティソに限定されていたが、先住民的要素を再統合して拡充した民族的な伝統に基づいた国民、しかしこれまでに国民に組み込まれてきた存在や価値規準を否定しない国民の形成を図るべきであると主張したのである。従って、先住

民的要素が再統合された民族的な伝統こそ、国民形成の精神的、文化的な基軸になるべきものであった。このような基軸をマリアテギは「民族性」と呼んでいる。

また、マリアテギは『七試論』において、1888年にゴンサレス・プラダがリマ市のポリテアマ劇場で行った宣言の中で述べた、「太平洋とアンデスのはざまに広がる地域に住むクリオーリョや外国人の諸集団が真のペルーを形成しているのではない。民族は山脈の東側地帯に散在するインディオ大衆によって形成されている」との表現を引用している [マリアテギ 1988: 213]。このゴンサレス・プラダの表現は、先住民に対する心情的な共感を表明した極めて情緒的なものではあるが、マリアテギにとりゴンサレス・プラダの言葉は、将来のペルーの精神性を示すものとして重視されたものと考えられる。そして、マリアテギは、国民形成の基軸となる民族性の形成を図ることを急務と考えた。

なぜなら、マリアテギにとって、ペルーの社会が先住民の存在を考慮せず、先住民を排除することによって形成されてきたことが最大の原罪と考えられたからである。先住民問題、土地問題など当時のペルー社会が直面したあらゆる問題が、この原罪に由来すると考えられた\*<sup>9</sup>。マリアテギは、ペルーの社会と経済が、先住民を無視して、先住民を排除して形成されたことを厳しく批判し、それゆえにペルーにはいまだ民族

\* 8 現代のペルーにおいて使用されている「インカイスモ」という言葉には種々の傾向があり統一的な定義は存在しないが、一般的には理想化されたインカ社会のイメージを非先住民層も含む国民統合の軸に据えようとする思想傾向をさす。しかし、マリアテギがここで使用している「インカイスモ」は、これとは異なり、先住民文化をナショナル・アイデンティティの主軸としようとする精神傾向を表しているものと思われる。

性が形成されていないと論じたのである。

## (2) ペルアニダ

マリアテギが民族性に関して初めて言及したのは、1924年11月28日付の『ムンディアル』誌に掲載したコラム「国民的なものと外来のもの」においてであった。その中でマリアテギは、「ペルーはいまだに形成の途上にある民族性である」、「国民形成の過程をまだ達成していない」と述べている [ibid.: 205, 207]。また、その後1928年に出版した『七試論』においても、「独自の特徴をもつペルーの民族性がいまだ存在しないということを、明確に示している」、「われわれは固有の民族性を形成しつつある」と述べている [マリアテギ 1988:

305]。

マリアテギは、これらの文章において、明確にペルーの民族性の形成は完了しておらず、形成の途上にあると主張している。では何故にマリアテギは、ペルーの国民は既に存在していると述べたと判断される表現を行ったのか。マリアテギが述べようとしたことは、ペルーの「国民」は1821年のスペインからの独立によって、民族形成を経ずに国家建設が行われた結果生じた擬制的な国民であり、形式的には存在しているがそれを規定すべき民族性の形成が完了していない、従って、形式的なものではなく、実質的な意味での民族形成、及び国民形成は完了していないということであったのではないか。そしてマリアテギは、1927年12

---

\* 9 マリアテギは「原罪」について次のように述べている。

\*「経済的事実を探り当てること、見ることなしにペルーの現実を理解することは不可能である。新しい世代は、正確にはこのことを理解していない。しかし、極めて敏感にそれを感じている。ペルーの基本的な問題は、先住民問題、土地問題、なによりもペルー経済の問題であることに気づいている。現在のペルーの経済、ペルーの社会は征服に本源的な原罪を有している。その原罪とは、先住民なしに、先住民に敵対して誕生し、形成されたことである。」 [Mariátegui 1988: 83]

\*「このドラマは征服という原罪から生まれた。先住民なしに、先住民に敵対してペルーの経済や社会を形成しようとするその原罪は共和制時代にも引き継がれてきた。」 [マリアテギ 1999: 216]

\* 10 マリアテギは「ペルアニダ」に関して次のように述べている。

\*「われわれの時代におけるペルーの歴史と精神との二重性は、コスタで形成発展した歴史形態とシエラで自然に根ざし生き続けてきた先住民の感情のあいだの矛盾として定義できよう。現代のペルーはコスタで形成された。新しい〈ペルアニダ〉は低地部において徐々に沈殿してきた。スペイン人やクリオーリョはアンデスを征服する術をもたず、実際に征服することもできなかった。アンデスにおいては、スペイン人は開拓者あるいは布教者にすぎなかった。クリオーリョもそうであり、アンデスの環境は征服者たちを消滅させ、少しずつ先住民を育てていった。これが現代のペルーで展開しているドラマである。」 [マリアテギ 1999: 216]

\*「先住民問題は、(中略) 紛れもなく正統なナショナリストの用語で表現するなら、ペルーの人口の5分の4を占める人々をペルーのナショナリティに同化させる問題である。先住民問題を解決しようという熱意や意志を、これほどまで激しく情熱的に主張している理念やプログラムに秘められたペルアニダを、いったい誰が否定できよう。」 [ibid.: 218]

\*「ペルーにおいてペルアニダを代表し、解釈できる人々は、ペルアニダを否定的ではなく肯定的なものとして考える。そして、スペイン人に征服・支配された4世紀のあいだにペルアニダを喪失し、それをまだ取り戻していない人々に、いま一度祖国を与えようと苦闘している人々である。」 [ibid.: 221]

\*「もしスペイン人の征服と植民地化によって決定された社会構成を〈ペルアニダ〉と理解するなら、歴史的にみてガルシラソは、最初の〈ペルー人〉である。」 [マリアテギ 1988: 195]

\*「新しいペルアニダは今後創造さるべきものである。その歴史的礎石は先住民でなければならない。おそらくその主軸は、コスタの粘土の上よりも、アンデスの岩の上に据えつけられるだろう。それはさておき、この創造的な仕事に、新生のリマ、活動的なリマも無縁ではなく、また無縁でいることは望まないであろう。」 [ibid.: 212]



月2日付同誌に掲載したコラム「民族的な伝統」において、「ペルーはいま創造の途上にある概念である」と述べているが、創造の途上にあるペルーの概念こそが、ペルーの民族性なのであり、「ペルアニダ(Peruanidad)」であった\*<sup>10</sup>。

「ペルアニダ」に関して述べたマリアテギの表現は、本来の「ペルアニダ」はスペイン人に征服・支配された4世紀の間に喪失し、それに代え新しい「ペルアニダ」がコスタに堆積されてきた、しかしこの新しい「ペルアニダ」に先住民的要素を加え、ひとたび「ペルアニダ」を失った人々に祖国を取り戻させねばならない、と要約できよう。従って、現代における「ペルアニダ」は、先住民の存在の上に、征服と植民地化によって付加された諸要素を融合したものを再び先住民的要素を重視して再編したものであるはずである。マリアテギは、この現代の「ペルアニダ」がいまだ形成の途上にあり、形成を完了していないと主張したのである。

このように、マリアテギにとって、ペルーの問題は「ペルアニダ」の形成、すなわちペルーの民族性形成の問題であった。そして、それは先住民を復権し、先住民を土台にペルーを形成することであった。マリアテギは、先住民問題の本質は「エスニック問題ではなく」、「土地問題であり(中略)封建制の解体の問題である」と主張したが、他方で「先住民問題は400万人のペルー人の問題である。(中略)民族性の問題である」、「ペルーの人口の5分の4を占める人々をペルーの民族性に同化させる問題である」と述べている [マリアテギ 1999: 218]。

ここで注意すべきは、マリアテギがペルーが抱える問題を「ペルーの問題 (problema peruano)」という言葉で表現したが、「民族問題 (problema nacional)」という言葉は使用していないことである。また、先住民に関連する問題を「先住民問題」という言葉を使用したが、これについても「民族問題」という表現は用いていない。周知の通り、当時コミンテルンにおいては第一次世界大戦前の民族問題とは、先に指摘したように、東欧における民族問題であったが、第一次世界大戦後は植民地体制の矛盾の露呈化を通じて重要問題化し、世界革命を目指す共産主義運動の補完部分と位置付けられ、植民地大衆の民族解放闘争が重要なテーマとなっていた。1920年7月にモスクワで開催されたコミンテルン第2回大会において、レーニンが起草した「民族・植民地についてのテーゼ」が採択され、植民地大衆の解放闘争が、全勤労大衆の同盟に一体化する部分として位置づけられた [いいだ 1980]。

マリアテギもコミンテルンにおいて民族・植民地問題が重要なテーマとなっていたとの事実を認識していたが、1929年6月にブエノス・アイレスで開催された第1回ラテンアメリカ共産主義者会議に提出した報告『ラテンアメリカにおける人種の問題』、『反帝国主義的視点』に見られるように、ラテンアメリカに関しては階級闘争を通じた人種問題の解決を重視し、民族自決論に基づく先住民国家の建設を否定した。先住民国家の建設は、結果的には先住民ブルジョア国家の創出をもたらすとして、これを斥けた [マリアテギ 1999: 345]。マリアテギの視野には、ラテンアメリカには、

反帝国主義闘争としての民族解放闘争は重要ではあるものの、国民はまがりなりにも既に存在するために、その国民に民族性を与えることがより重視された。そのためには、特にペルーの場合には、国民の大部分を占める先住民を土台とした民族性を形成することがなによりも優先的な課題と考えられ、そのためには社会主義闘争に先住民を合流させる以外に方法はないと考えた。

いわば、このような課題は対外的な民族解放ではなく、帝国主義と癒着した国内支配層に対する国内的な解放闘争であると考えた故に、「民族問題」との表現が一切用いられなかったのではないか。ここにも、マリアテギが国民は既に形成されているとする姿勢が窺われる。要は、既に存在する国民に内実を与え、それを真のペルーの国民に変革することであると考えたのではなかったか。

そしてマリアテギは、先住民問題の解決は封建的な大土地支配体制の解体であると考え、先住民が持ち続ける「互惠」の精神や「共同労働」の習慣によって培われてきた「連帯」の思想が、労働者の社会主義を目指す階級闘争と合流すれば、資本主義の諸段階を完全に経ることなしに社会主義の段階に進みうると考えた [Mariátegui 1975a: 273]。従来のマリアテギ研究においては、将来的な社会主義の基盤は、先住民共同体が共有地を媒介にした協同組合化を通じて形成しようとの視点をマリアテギが示したことが注目されてきた。しかし、筆者はマリアテギがこのような可能性を示唆した点よりも、先住民の間で継承されてきた「互惠」の精神や「共同労働」の習慣に着目した点をより重視する。マリアテギ

が重視したのは、先住民共同体における共有地制度の存続もさることながら、「互惠」と「共同労働」に見られる先住民の精神性であった。マリアテギの思想の現代的な有効性として指摘されている点はまさにこの点にある [Montoya 1992: 54]。他方、共有地制度はマリアテギが生きた1930年までにおいてさえ、大部分が解体されつつあった。

以上の通り、マリアテギは、当時のペルーが直面する問題を「民族問題」との語を用いず、「先住民問題」との語に集約させ、先住民が置かれている社会的・経済的問題の解決を先住民の復権と位置づけ、これを通して先住民が国民の土台となるような真のペルーの形成を目指したと考えられる。そして、マリアテギの死後70年を経た現代においても、ペルーの国民国家は未だ形成されていないと論じられている [友枝 1988: 276]。

### III. マリアテギの人種論

#### (1) 人種問題への視角

それでは、マリアテギは国民の形成に関して、ペルーを構成する種々の人種的諸要素をいかに捉えていたか。まず、人種問題に対する視角から検証する。マリアテギは、生物的な意味での「人種問題」と表現するとき、「人種の (“racial” あるいは “de las razas”）」との用語を使用せず、「エスニックな (étnico)」との用語を用いた。「エスニック」なる用語が世界的に多用されるのは、ナチズムが政権を掌握して以後に「人種」の用語を避ける傾向が生じた後であり、特にフランスの人類学の影響であったと言われている [Manrique

1995: 444-447]。他方、マリアテギは、「エスニック」なる語を生物学的な意味での人種に限定して使用している。例えば、「先住民問題がエスニック問題であるという考えは、論じるに値しない」[マリアテギ 1999: 295]、あるいは、「先住民問題はエスニック問題であるという規定は、帝国主義思想のもっとも古くさいレパトリーである」[マリアテギ 1988: 28]と述べている。

マリアテギは、「人種」問題とは生物学上の優劣の問題ではなく、社会的に研究されるべき社会・経済的問題であると考え、このような視点から「人種」問題を考える際には、「人種の問題 (problema de las razas)」と表現し、決して「人種的問題 (problema racial)」との表現は用いていない。すなわち、「人種」集団を問題視するのではなく、その「人種」集団がおかれている社会・経済・文化的位置が問題視される場合が、マリアテギにとっての「人種の問題」なのである。これに対し、ダーウィニズム的な種の優劣の視座から論じられる場合を「エスニックな」視点と見たのである。このような「エスニック」なる用語の使用法は、当時のペルーにおいて、社会ダーウィニズムを批判する潮流によって行われたものであり、マリアテギのみに見られたものではなかった。

このような用語の使用法は、現在における使用法から見れば全く逆である。現在は一般に、「エスニック」なる言葉に社会・文化的要素が付されている。しかし、20世紀初頭のペルーにおいては、マリアテギが示したような使用法が一般的であった。マリアテギが「人種 (razas)」を多用したこ

とをもって、人種差別主義者と決めつける議論もあるが、これは時代背景を踏まえない意見である。用語の使用の問題に関して重要な点は、マリアテギが「人種」問題を生物学的な観点からではなく、社会・経済・文化的な観点から捉えており、生物学的観点から捉える場合には明確に異なる用語を使用したという事実である。

## (2) 先住民論

マリアテギが先住民問題に関心を持った理由として3つの要因を挙げ得る。第一の要因は、幼年期の体験である。マリアテギは、リマ市の名門であるマリアテギ家の私生児としてコスタ (海岸部) 南部のモケグア市で母子家庭に出生、翌年には母親アマリアの都合でリマ市を経て母方の叔父が居住するリマ県チャンカイ郡ワチョ市に転居した。そこで1902年まで過ごした。

チャンカイ郡には1890年代から1910年代にかけ、綿花生産に従事する大土地所有が拡大したため、住民の大半はアジア系 (中国人, 日本人) や黒人であった。これに対し、ワチョ市の人口構成は先住民が85パーセントに対し、アジア系が10パーセントであった。従って、マリアテギはワチョ市というコスタの都市に住みながらも、先住民系が大部分を占める環境の中で幼年時代を過ごした。また、ワチョ市でマリアテギ一家が世話になった母方の実家が先住民色の濃いメスティソで先住民に極く近いということから、先住民に対する親近感を強めたと考えられる。

二番目の要因は、太平洋戦争における敗北から自国の国民形成の問題を根底的に再考すべしというゴンサレス・プラダに代表

される知識人による問題提起がなされたことである。

三番目の要因は、19世紀後半から20世紀初頭にシエラ（山岳部）の南北を席卷した先住民の反乱である。筆者が調査しただけでも、1850年から1930年までの80年間に、1867年のプーノ県においてブスタマンテが率いた反乱、1885年のアンカシュ県においてアトゥスパリアが率いた反乱、1915年のプーノ県においてルミマキが率いた反乱、1921年のクスコ県においてワルカが率いた反乱、1923年のアヤクチュ県においてロメロが率いた反乱など75件の先住民反乱が発生している。反乱の原因は、羊毛生産が国際市場に取り込まれたことによるアレキパ等の商業資本や仲買人による先住民共有地の収奪と、大土地所有者の先住民に対する酷使にあった。このようなアンデス地域における先住民反乱の続発は、白人クリオーリョ層をはじめとする非先住民に大きな危機意識をもたらすとともに、先住民が置かれた環境に関する関心を高め、先住民を擁護するとともに、先住民をペルーの国民形

成に統合すべしとする論調をクリオーリョ層の間に生じさせた\*11。

マリアテギも幼年期に形成された先住民に対する親近感や時代精神の反映もあり、先住民に対して好意的な言及を行っている。マリアテギの先住民の特性に関する基本的姿勢は、人種優劣論からの先住民に対する劣等視を拒否し、先住民の文明と精神性を評価するものであった\*12。特に、マリアテギが強調したのは、「劣った人種という考えは、白人西洋による拡張と征服の事業に奉仕した」[マリアテギ 1988: 28]という点、先住民劣等視は「白人西洋」による征服のイデオロギーであったという点である。

### (3) メスティソ論

マンリケは、幼年期の10歳までリマ県チヤンカイ郡ワチュ市に住んでいた時期に、マリアテギは先住民に対して親近感を深めた一方で、メスティソであることへの自己否定、クリオーリョ文化に対する違和感、黒人やアジア系の人々に対する否定的な感情を強め、青年期になってもメスティソ、

\*11 マリアテギは、1915年頃より先住民問題に徐々に関心を示し始めた [Meseguer 1974: 43]。その後、『エル・ティエンボ』紙に勤務していた1917年1月17日、同年4月25日に、1915年にプーノ県において発生したルミマキの反乱に関して言及し、先住民反乱の中には千年王国的なインカ復活願望が存在することを指摘していた [Mariátegui 1994 Tomo II: 2826, 2902]。

\*12 マリアテギは先住民に関して次のように述べている。

\*「共有財産と共同作業の紐帯を失った家族の集合体である先住民村落においては、いぜんとして、共産主義的精神の経験的表現である協同や連帯の習慣がなお頑強かつ根強く残っている。〈共同体〉はこの精神に相応しており、この精神の肉体なのである。」[マリアテギ 1988: 65]

\*「生まれた環境内にいるインディオは、移住によってそこから引き離されたり変形されたりしない限り、なんらメスティソをうらやむ必要はない。」[*ibid.*: 318]

\*「インディオは過去と訣別していない。彼らの歴史過程は停止し麻痺してはいるが、それによって自らの個性を喪失しているわけではない。インディオは、習慣、生活感情、生活空間に対する態度を保持して社会的に存在している。」[*ibid.*: 318]

\*「先住民が劣等であるという偏見が、資本主義による先住民労働の最大限の搾取を可能にする。」[マリアテギ 1999: 295]

\*「進歩や近代的生産技術に対する同化能力において、インディオはいささかもメスティソに劣らない。一般的にみてむしろ勝っている。劣等な人種であるという見解は、もはや信用されず、いまや反ばくするに値しない。」[*ibid.*: 298]

\*「インディオは、社会的経済的条件の変化によって、物質的、知的に向上する可能性が生まれる。それは人種ではなく、経済と政治によって決定される。」[*ibid.*: 300]

アジア系、黒人に対して偏見とも呼びうる感情を有していたと指摘している [Manrique 1995: 453-455]\*<sup>13</sup>。

マリアテギは、メスティソであることへの自己否定から、メスティソについては極めて否定的な感情を有していた。1928年に出版した『七試論』において、「インディオとメスティソの社会層に関する社会学的研究において大切なことは、メスティソが出身人種の資質や欠点を継承している度合いではなく、インディオよりも容易に白人の社会状態とか文明形態にむかって進化する能力である。(中略)メスティソは、工業的でダイナミックな都市的環境のもとで、みずからの習慣や活力や成果をもとにして、白人との間の距離を急速に克服し西洋文明と同化している」[マリアテギ 1988: 316-317]と述べ、メスティソが白人文明に容易に同化する傾向をシニカルなトーンで批判した。これはコスタにおいて見られた現象である。

マリアテギによれば、シエラにおいてはガルシアが「ヌエボ・インディオ」と呼ん

だ、先住民精神に同化したメスティソが生じていた\*<sup>14</sup>。ガルシアは、メスティソ文化の形成に基づく「メスティソ=新しいインディオ(ヌエボ・インディオ)」を主張した。この「ヌエボ・インディオ」は人種的には混血化しつつも、精神的には先住民の精神性に根を下ろし、他方で西欧の先進性をも兼ね備える存在である。また、ガルシアは先住民も新鮮な精神性を摂取して「ヌエボ・インディオ」に転化しようと主張した。すなわち、ガルシアの「ヌエボ・インディオ」には、先住民の精神性に同化したメスティソ(更には白人)と、新しい精神を植え付けられた先住民の2類型が存在する [García 1930: 95-127]。マリアテギが言及しているのは、明らかに前者であった。

他方、先住民問題の解決は人種混血によって克服しようとの主張が、20世紀初頭のペルー社会に絶大な影響力を持った実証主義的な進化論に基づいて行われた。これに対してマリアテギは人種間の優劣の存在を否定する立場から、「先住民問題はエスニック問題であるという規定は、帝国主義思

\*13 タピアはマリアテギの思想の進化は、自己アイデンティティの模索プロセスと対応していたと指摘して、先住民色の濃いメスティソであるマリアテギが、青年時代の白人クリオーリョ世界やコスモポリタン文化への志向から、ヨーロッパ渡航をへて、先住民系を土台としたメスティソに自己アイデンティティを見出したプロセスであった、そしてマリアテギがペルーの国民性を先住民を土台とした文化的メスティソに据えたのは1924年以後であったと述べている [Tapia 1995: 516]。なお、タピアは文化的メスティソ化は、マリアテギが提起したような社会主義を目指す闘争を通じてなくとも、1940年代以後に生じた先住民の都市部への移動を通じて進行した「チョロ化」によって実現されたと論じている。

\*14 マリアテギはガルシアについて次の通り言及している。

\*「コスタの人々はシエラの人々とひじょうに異なっている。シエラでは、大地の影響でメスティソが先住民化し、先住民精神によるメスティソの吸収といったことさえほぼ行われているが、コスタでは、植民地支配がスペインからうけついで精神をいまだ残存させている。」[マリアテギ 1988: 305-306]

\*「ウリエル・ガルシア博士は、メスティソのうちにネオ・インディオを見出している。しかしこのメスティソは、アンデスの環境と生活の影響のもとでのスペイン人種と先住人種の混交からみいだされた人間である。ガルシア博士が調査をおこなっているシエラの生活環境は、白人侵入者を同化してしまっている。両人種の交差から、地域の伝統や環境からつよい影響を受けたネオ・インディオが生まれたのである。数世代をへてなお、たえず土地と文化の環境そのものの圧力をうけて、すでに一定の特徴をそなえたこのメスティソは、コスタで両人種が創造したメスティソではない。コスタの烙印はより鮮明で、スペイン的要素がより強大だからである。」[マリアテギ 1988: 314-315]

想のもっとも古くさいレパトリーである。劣等な人種という考えは、白人西洋による拡張と征服の事業に奉仕した。先住人種と白人移住者を積極的にかけあわせることによって先住民の解放を期待するという考えには、反社会的な稚拙さがあり、メリノ種の羊の輸入業者だけが、その幼稚な頭で考えることである」[マリアテギ 1999: 28]と述べ、また、「ラテンアメリカのブルジョアジーとガモナル<sup>\*15</sup>の大部分は、インディオ劣等説を熱心に支持している。彼らの考えでは先住民問題は、エスニック問題であり、それを解決するのは先住民と優れた外国人との交差であるという。しかし、封建制に基づく経済が存続するかぎり、移民の移動とは相容れず、混血による変革を生み出すことはできない」[マリアテギ 1999: 295]と強く反論している。

更に、ラテンアメリカにおける人種問題がメキシコのバスコンセロスが提起した『宇宙人種 (Raza Cósmica)』の概念を通じて克服しようとの立場をも批判する<sup>\*16</sup>。マリアテギにとっては、バスコンセロスの宇宙人種は生物学的な人種融合の結果生ま

れる融合人種概念であり、しかも具体的な社会・経済的条件におかれている現在のメスティソの環境を考慮にいれたものではなかった。マリアテギが抱いたメスティソ化の概念は、人種混合の結果ではなく、文化的多様性の共存を意味するものであった。マリアテギが、このような文化的メスティソ論に到達するには、メスティソとしての自己否定という苦闘を経なければならなかった。

そもそもマリアテギのメスティソとしての自己否定は、前述の通り、幼年時代の環境の産物であり、周囲のメスティソに対する嫌悪が、白人クリオーリョ世界への憧憬と、それへの否定を通じて先住民世界に回帰し、その先住民世界をペルーの民族性の中で生かす方途として、文化的メスティソ化という概念に到達したものと考えられる。

既に引用したように、マリアテギは国民の問題に関して述べた部分で、「国民的なナショナルな伝統は、インカイスモを再統合することによって拡充した。しかし、それを再統合したからといって、国民としてのわれわれの存在や個性のなかに強固に組

\*15 ガモナルとはシエラに典型的に見られた特定地域に支配力を有した政治・社会的ボスであり、多くの場合には大土地所有者であったが、時として大土地所有者層と癒着した地方行政担当者である場合もあった。

\*16 マリアテギはバスコンセロスの〈宇宙人種〉について、次のように述べている。

\*「バスコンセロスが、白人人種の絶対優越論をアングロサクソンの帝国主義的偏見であると告発するのは正しい。ラテンアメリカは同時にあらゆるメスティソ化の劣等視をもたらすこの偏見を克服する必要がある。バスコンセロスはメスティソ化に宇宙人種の希望を据える。しかし、イペロ系の血とインディオの血の交差をスペイン植民地化の精神に帰するとき、それは誇張しすぎている。」[Mariátegui 1975b: 84]

\*「バスコンセロスの熱っぽい予言によれば、熱帯とメスティソとは新しい文明にとっての舞台と主人公である。しかし、言葉の積極的で哲学的な意味において、ユートピアを描くバスコンセロスの説は、彼が将来の予言をしようと望んでいる限りは、現在を抹殺し無視している。……バスコンセロスが称賛するメスティソ化は、すでに大陸で進行中であるスペイン人と先住民とアフリカ系の人種の混合ではなく、まさしく純化のための融合と再融合であり、1世紀後には宇宙人種が生まれるという。現在の具体的なメスティソは、バスコンセロスにとっては一つの新しい人種とか新しい文化の型ではなく、やっとなつの見込みなのである。哲学者でユートピア主義者の思索は、時空上の制約を知らない。」[マリアテギ 1988: 314]

み込まれてきた他の諸要因、価値規準がまったく無効になるわけではない」と述べていたように、スペイン人の征服以後に到来した諸要素や彼らが有する価値観と、先住民の価値観の共存の中に国民のあり方を求めたし、今後創造される「ペルアニダ」にリマも無関係ではいられないとの表現をしている。このことから、マリアテギは先住民を土台としながらも、多様な価値観の融合を目指したと理解される。

マリアテギは、「ペルーにおいては、環境の相違といくえにも交錯した人種の無数の結合が原因で、メスティソがつねに同じ意味を持つとは限らない。混血は、スペイン人とインディオという二重性を解決するどころか、複雑なバリエーションを生み出す一現象であった」[マリアテギ 1999: 314]と述べているが、このような複雑なスペクトル化したバリエーションの発生によって、文化的多様性が逆に徐々に文化的融合に向かうことに、マリアテギは将来的な人種問題の解決の方向性を見たのではないか。

#### (4) 黒人論・中国人論

マリアテギは黒人と中国系に対して極め

て否定的な見方をしている\*17。マリアテギの黒人、及び中国系に対するこのような評価は、前述の通り幼年時代の環境が大きく影響していると思われる。ワチョ市の周辺に存在するチャンカイ郡の大農園には黒人や中国系の人々が多くエンガンチェと呼ばれる事実上の債務奴隷制度のような労働環境の中で働いていた。

マリアテギは本来、黒人に関して、スペイン人が黒人をもたらしたのではなく、奴隷制を持ち込んだことを批判している。黒人がペルーに到達したのは、ピサロの遠征時からであった。1580年にはリマ市において2000人の黒人奴隷の存在が記録されている。しかしマリアテギは、スペイン人が奴隷制を導入したことを批判した際、黒人を「劣等人種」と表現し、「インディオを退化させた」とまで言っており、自らが批判した人種優劣観に陥ってしまっている。マリアテギが黒人を批判する理由は、黒人が容易に白人支配層の側に立って先住民を敵視する傾向をたびたび示したことであった。これはまさに、コスタの大農園において、農園主による分断支配の中で看取された傾向であった。

\*17 マリアテギは黒人と中国系について次のように述べている。

\*「中国人と黒人は、コスタにおける混血を複雑にしている。これらの人種の要素はいずれも、ナショナルリティの形成に対して、文化的価値をも進歩的エネルギーをもたらさなかった。」[マリアテギ 1988: 315]

\*「こんにち植民地期に対して非難すべきことは、半世紀前の社会学者による非難の中心となってきたように、劣等人種を輸入したことに對してではない。すなわち、征服や力によってのみ樹立された体制を強化するために、植民地の経済組織や開発組織としては不適切な奴隷制をもちこんだ責任に對してである。この疾病からいまだ解放されていないコスタ農業の植民地的特徴は、その大部分が奴隷制に由来している。コスタのラティフンディオは、その土地を肥沃にするために、労働力としてのみの人間をもとめた。それゆえ黒人奴隷が不足したとき、かれらは中国人クーリーにその代替物をもとめた。〈エンコメンデロ〉体制に特徴的なこのクーリー輸入は、黒人輸入と同様に、独立革命が樹立した政治秩序に一致する自由経済の正常な形成に對し、敵対する桎梏となった。セサル・ウガルテは、引用したペルー経済についての研究のなかでこのことをみとめ、ペルーが必要としたものは〈労働力〉ではなくて〈人間〉であると、きっぱりと断言している。」[マリアテギ 1988: 45]

他方、中国系に関してマリアテギは、中国人移民がペルーの民族性の形成において貢献しうる可能性を過小評価した。彼は中国人移民が中国文明に由来する道徳的規範も、文化的・哲学的伝統をもペルーにもたらさなかつた点を指摘し、「われわれは、西洋を通じて老子と孔子を知った」と述べ批判した [マリアテギ 1988: 315]。また、「中国人はペルーに、人種上の接ぎ木はしたが文化上の接ぎ木はしなかつた。中国人移民は、ペルーに中国文明の本質的要素のいずれをももたらさなかつた。おそらくそれは、祖国においてかれらが活動的で創造的な力を失っていたためであろう」 [マリアテギ 1988: 315]、「中国人は衰弱しきつた東洋の宿命論と無気力と欠点を子孫に注入したように見える。賭博は、風紀の紊乱と不道徳の原因であり、努力よりも天運を信用しやすい人民にとくに有害なものであるが、その最大の刺激を中国人移民から受けている」 [マリアテギ 1999: 315]、「要するに中国人はかれらの道徳的規範も、文化的・哲学的伝統も、農夫・職人としての技能も、メスティソに対して伝達してないのである。手のつけようのない言語、移民という身分、クリオーリョが移民に抱いている昔からの侮蔑が、中国人の文化とその社会環境とのあいだに介在しているのである」 [ibid.: 315-316] と述べている。

中国人苦力がペルーに導入されたのは、非合法的には1831年からであったとされているが、合法的には1849年11月に「中国法」が公布されて以後、急増した。1849年から1874年までに9万2000人が到着し、当初はグアノ採集、その後砂糖生産、綿花生産、鉄道建設に従事した。1879-83年に発

生した太平洋戦争の際には、進駐してきたチリ軍を解放軍と見なして一部が従軍したこともあり、国民の間に反中国人感情が広がっていた。マリアテギもこのような反中国人感情の影響を受けていたものと考えられる。

#### (5) クリオーリョ論

マリアテギの人種論において、クリオーリョは現地生まれの白人を意味するのみでなく、非先住民系のすべてのペルーに生まれた者を指しているように思われる。しかしマリアテギは、クリオーリョはペルーの民族性を代表していないとして、「ペルー文学におけるクリオリスモは、ナショナリズムの精神をもった一つの潮流として隆盛をみることはできなかつた。なによりもその理由は、いぜんとしてクリオーリョがナショナリティを代表していないことである」 [マリアテギ 1988: 305] と述べている。更にマリアテギは、「クリオーリョの明確な定義はいまだない。今日まで〈クリオーリョ〉という言葉は、きわめて多様なメスティソの複合体を総称するために役立つ一用語でしかない。ペルーのクリオーリョは、たとえば、アルゼンチンのクリオーリョのなかに見出せる特徴に欠けている。アルゼンチン人は世界のどこにいても容易に識別できるが、ペルー人はそうではない。この対照性こそは、アルゼンチンの民族性が既に存在している一方で、独自の特徴をもつペルーの民族性がいまだ存在していないということを、明確に示しているものである。ペルーにおけるクリオーリョは一連の多様性を示している」 [マリアテギ 1988: 305] と述べ、ペルーの民族性が形



成途上にあるために、クリオーリョに関する明確な定義も存在しないと論じている。ここで重要なことは、マリアテギが「ペルーにおけるクリオーリョは一連の多様性を示している」と述べていることである。この「多様性」という言葉は、後述の通り、マリアテギの思想を理解する上で一種のキーワードとなる。

他方でマリアテギは、ペルーの歴史において、クリオーリョが植民地的精神に反発してゆくという肯定的な傾向を示していることを見逃さない。先住民に接近し、ペルーの発展のためには先住民を復権させ、ペルーの国民性の土台にしていかなければならないと主張するインディヘニスムに向かう方向性が、クリオーリョの中から生まれてきていたことを評価している\*18。

このようなクリオーリョの中から植民地精神に反発してゆく者たちがマリアテギに代表される「新しい世代」を形成していったのである。他方、マリアテギはクリオーリョの中でも、リバ=アグエーロやガルシア・カルデロンのようなアリエル派を植民地精神への回帰を目指す保守反動的な潮流として「知的ヘゲモニー」をめぐる闘争において主要な敵に据えた。アリエル派の精神潮流を覆す上で、重要な社会的機能を果たすとマリアテギが考えたのがインディヘニスムであった。

#### IV. インディヘニスム

インディヘニスムは、狭義には20世紀前半におけるナショナル・アイデンティティ模索の上で重要な影響を及ぼした文学・芸術運動であった。19世紀後半からペルーに登場したインディヘニスムの文学・芸術潮流は、先住民層によってではなく、非先住民層によって創造されたものである。マット・デ・トゥルネル (Clorinda Matto de Turner) やゴンサレス・プラダが19世紀の代表的なインディヘニスムの文学者である。その後、ロペス・アルブハル (Enrique López Albújar), バジエホ (Cesar Vallejo), アレグリア (Ciro Alegría), アルゲダス (José María Arguedas) などの文学者が登場した。画家ではサボガル (José Sabogal) が代表的である。また広義には、文学・芸術運動に限定せず、スーレン (Pedro Salvino Zulen) やメイエル (Dora Meyer de Zulen) のように1909年に「先住民擁護協会 (Asociación Pro Indígena)」を設立して、先住民擁護運動を展開した法学者や哲学者等もインディヘニスタに含められる。

マリアテギが、インディヘニスム論を本格的に展開したのは、サンチェス (Luis Alberto Sánchez) が行った問題提起を受けて、これに反論するために執筆した一連の論稿においてであった。両者の論争はイ

\*18 マリアテギはクリオーリョの前向きな性格に関して、次のように述べている。

\*「純粋なクリオーリョは、一般的にその植民地的精神をたもっているものだが、現代のヨーロッパ化されたクリオーリョは、植民地的精神の限界と懐古趣味への抗議にとどまってはいるものの、植民地的精神に対し反発している。」[マリアテギ 1988: 307]

\*「バルデロマルやファルコンのようなクリオーリョでコスタの人間が、はじめに人種に目をむけた人々のなかに数えられているが、これらの人々の企図的確さを否定することはできない。」[マリアテギ 1988: 324]

ンディヘニスモ論争と言われている。この論争は、1927年1月にマリアテギが『ムンディアル』誌に3回にわたって「国民文学におけるインディヘニスモ」と題して掲載した論稿を契機に開始され、両者が中心となって、更に多くの識者が参加した。サンチェスがインディヘニスモを批判したのは、マリアテギはシエラとコスタ、白人と先住民という二項対立の図式を所与のものとして捉えそれを助長しているとする点などであった\*19。これに対しマリアテギは、「自分の理想は植民地的なペルーでも、インカ的なペルーでもなく、統合ペルーである」と応えている [Aquézolo 1976: 88]。

インディヘニスモ論争においてレギア体制派のクスコ県選出のエスカランテ議員は、インディヘニスモがコスタの知識人層の産物であると批判したが [Aquézolo 1976: 39-52]、マリアテギも、インディヘニスモが基本的に非先住民層による文学運動であった点は十分に認識していた。しかし、それがクリオーリヨをはじめとする非先住民層の意識の変革を示すものであり、ペルーの民族性形成を導く上で重要な要素となることを評価した\*20。

このように、マリアテギはインディヘニ

スモ文学がコスタのメスティソやクリオーリヨによって創造されたものであることを認めつつも、しかしインディヘニスモによって体現された精神は、先住民が居住するシエラから発したものであると指摘し、「インディヘニスモは、コスタの人間の知識や感情から形成されたものとしてだけ現象してはいない。インディヘニスモのメッセージはなによりもシエラから到来する」と述べ、1927年にクスコに誕生した先住民復興運動である「レスルヒミエント (Resurgimiento)」を挙げて、その意義を高く評価した [マリアテギ 1999: 232]。

マリアテギにとって、インディヘニスモは単に文学潮流ではなく、新しい時代精神を代表するものであった。マリアテギは、「文学上のインディヘニスモが、新生ペルーの精神や意識を体現していることを理解するためには、若者のあいだで日ごとに同調者をえている思想的・社会的潮流との明白な一致と、密接な関連性に注目するだけで十分であろう」 [マリアテギ 1988: 303]、  
「ペルーにおける〈インディヘニスモ〉は、ウルグアイにおける〈土着主義〉のように、本質的に文学的現象なのではない。その根源は別の歴史的土壌によって育まれた。正真正銘の〈インディヘニスモ〉は、単な

\*19 サンチェスのマリアテギの姿勢に対する批判は、(i)マリアテギはコスタ対シエラ、白人対先住民という対立図式で捉えている、(ii)先住民共同体を理想化し過ぎており実態から隔たりがある、(iii)チョロ等の社会層を含んだ包括的な運動の可能性を視野に入れていないことの3点に集約される [後藤 1996: 41]。

\*20 マリアテギはインディヘニスモがペルーのナショナリティ形成に果たす役割に関して次のように述べている。

\*「インディヘニスモ文学は、……われわれに先住民固有の魂を示すこともできない。それは、いぜんとしてメスティソの文学なのである。従って、インディヘニスモと呼ばれても、先住民とは呼ばれない。先住民文学は到来すべきであり、しかるべき時機に到来するであろう。」 [マリアテギ 1988: 310]

\*「今日、過去との訣別は現実となった。すでにわれわれが見たように、〈インディヘニスモ〉が〈植民地主義〉をその根元から少しずつ引き抜きつつある。そして、この衝動はもっぱらシエラから生まれ出ているのではない。」 [マリアテギ 1988: 324]

る〈エキゾチズム〉によって先住民のテーマを模索する人々と混同されるべきではない。かれらは、意識的であるなしにかかわらず、復興でも再興でもない、復権という政治的・経済的事業に協力しているからである」[マリアテギ 1999: 307]と述べている。前出の通り、先住民要素を民族性の土台とすることは他の諸要素の排除を意味するものではないとして、スペイン出自の要素をも排除しないとの姿勢が表明されているのを見た。この点に関して、マリアテギは、「インディヘニスモの潮流が発展しても、パルー文学の他の重要な要素の発展を脅かし、麻痺させることはない。もちろん〈インディヘニスモ〉は、文学の舞台を独占したいとは望んでいない。他の運動や示威活動を排斥し、あるいは妨害するものではない。しかしこの潮流は、パルーの社会経済発展のやむにやまれぬ要請に条件づけられた、新しい世代の精神的方向づけとの近似性と関連性によって、一時代のもっとも特徴的な色彩や傾向をあらわしているのである」[マリアテギ 1999: 310]と論じている。

ここでマリアテギが主張しているのは、文化や価値観の多様性の容認である。マリアテギはスペイン出自の要素に関してはパルーを活性化させるとの積極的評価をしておらず、むしろ過去への回帰であると見ているが、他方、現代の他のヨーロッパ文明との接触によって沈滞していた文明が再び活性化する可能性があることを示唆していた\*21。

マリアテギが遺した蔵書のリストを作成したバンデンによれば、その中にはシュペングラーの『西洋の没落』が入っており、またマリアテギ自身も『西洋の没落』について論じている。マリアテギは西洋文明の衰退につき語ったものの、その西洋文明とは資本主義文明であり、社会主義の実現によってその衰退は克服しようとしたために、西洋文明が没落したという深刻な危機感を抱いていなかった。むしろ、西洋文明と接触することが非西洋文明にとって刷新の契機となりうるとした。それ故に、インディヘニスモが社会主義と合流することによって、ヨーロッパ的要素をも否定しない民族性が形成できると主張したのである\*22。

- 
- \*21 マリアテギは非西洋文明が西洋文明と接触して再生するとの点に関して、次のように述べている。  
 \*「先住民社会はいくぶん原始的で遅滞しているように見えるが、社会と文化の一つの有機的な形態なのである。そして、日本、トルコ、かの中国などの東洋諸国の経験は、すでにいく時代をもへた土着社会が、どのようにしてみずからの歩みによって、しかも短時間のうちに、近代文明への道を発見しえ、西洋諸国の教訓を自国言語に解釈しえたかを、われわれにしめしてくれているのである。」[マリアテギ 1988: 319]  
 \*「パルー文学は世界主義の時代に入っている。リマにおけるこの世界主義は、少なからぬ腐食性をもつ西洋的退廃の模倣と、アナーキーな世紀末の様式の採用ととりわけあらわれている。しかし、この不安定な流れのものと新しい感情、新しい啓示が予見されている。非難されることが多い、この普遍的でエクメニクな道をへて、われわれは刻一刻われわれ自身に近づきつつあるのである。」[マリアテギ 1988: 324]
- \*22 マリアテギは社会主義とインディヘニスモの合流に関して、次のように述べている。  
 \*「私が主張したいのは、物事の内容や本質を凝視できる人なら、〈インディヘニスモ〉と社会主義との合流や融合に驚きはしないということである。社会主義は、大衆、労働者階級の復権をめざすと明確に述べている。このパルーにおいて、大衆、労働者階級の5分の4は先住民である。それゆえ、まずなによりも先住民の復権に連帯しなければ、われわれの社会主義はパルーにも根づかないし、社会主義ともいえないであろう。」[マリアテギ 1999: 231]

マリアテギにとってインディヘニスは、先住民問題を解決してゆく上での媒体であり、インディヘニスと社会主義の合流を主張したものの、それを社会主義者の立場から掲げたのである。マリアテギにとりインディヘニスは、ペルーにおけるポストコロニアルの象徴であった植民地的精神を代表するアリエル派の知的ヘゲモニーに対して、ペルーの変革を目指す「新しい世代」によるヘゲモニー闘争の手段であった。しかし、マリアテギ自身がインディヘニスタであったことはなかった。マリアテギは、植民地的精神に対する新しい知識人の意識形態としてインディヘニスを評価し、それをペルー史の中にかくに位置づけるかという思想的作業を行ったに過ぎない。マリアテギが目指したのは、多元主義という意味での文化的メスティソ（融合）化であった。その意味では、晩年のアルゲダスと類似した志向性を有していたと言える [後藤 1997: 45]。

### 結び：ポストモダンへの視角

マリアテギの思想、特に「国民」に関連する議論が現在の有効性を有しているか否かを問う場合、マリアテギが展開した主張が1920年代という時代に拘束されたものであったという点を見逃すことはできない。しかし、マリアテギの思想は時代的拘束の中にとどまるものではない。現在においても参考すべき点は種々ある。ここではそのうちの2点につき言及し、本稿の結びとしたい。

一番目は、マリアテギが自覚していたか否かに拘らず有していたところのポストモダンに向けた、文化の多様性あるいは多文

化主義の容認という姿勢である。二番目はグローバル化プロセスの渦中における「国民」の捉えかたの問題である。

マリアテギは、サンチェスとの間で行ったインディヘニスモ論争において、「自分の理想は植民地的なペルーでも、インカ的なペルーでもなく、統合ペルーである」と述べた。マリアテギが、「統合的」という語を用いたために、マリアテギの思想を「統合論」の域を出ないとの評価も行われている。しかし、筆者は、マリアテギ思想の特徴の一つは「共生・共存」の思想であると考えられる。マリアテギの「統合」の概念は、少数者の排除を含む統合論ではなく、むしろ少数者の存在や価値観を受け入れる「共生・共存」の思想にも基づくものであると考える。その根拠は、前章までに示した通り、マリアテギが先住民、白人、すべての種類のクリオーリョ、メスティソ、黒人、ムラート、アジア系をも含むペルーの国民性の土台に先住民を据えようとしたことは、マリアテギがペルーに存在するあらゆる人種の諸要素の共存と共生を図ろうとしたものであるからである。従って、この姿勢を、特定のモデルへの統合を目指すような「統合論」と捉えることは誤りであろう。マリアテギが強調しようとしたのは、先住民系を土台としつつも、重なり合う複数の文化的要素の異種混交的で相互浸透的なクリオーリョ性と、そのクリオーリョ性において混成的な雑種性を増す文化的メスティソ化の共存である。そして西洋文明の呪縛から脱却して、西洋の対立項として本質化するのではない仕方で、ペルーの将来的な国民性を想定した。いわばマリアテギはグローバル化の進展によって人種と文化の混成化

が進み、文化とアイデンティティを個々に対応させてゆくのでは捉えられない事態が広がることを予見した。その視点はまだ国民国家を越えるものではなかったが、姿勢そのものの中にはそれを越える視野を窺わせるものがあった。マリアテギはグローバル化という用語は用いていないが、『七試論』の末尾で、「普遍的な道、全世界的な道 (caminos universales, ecuménicos)」との言葉で表現しているものが、グローバル化に伴う現象を捉えているように思われる。

大戦間期に、現在われわれを取り込んでいるグローバル化に先立つ、前段階的なグローバル化の現象があったと指摘されるが[吉見ほか 1999: 159-160]、マリアテギもそのようなグローバル化の進展を1920年代において認識していたふしがある。そして、マリアテギはこの「普遍的、全世界的な道」を通じて、「われわれは刻一刻われわれ自身に近づきつつある」と述べているが、この立場はグローバル化の中で、ナショナルな傾向が逆流として噴出するという現象の中で行われている自己探索の営為を先取りするものであったと言えよう。

もとより、マリアテギの思想にも種々の矛盾点があり、論理的整合性に欠ける面があることは否定できない。例えば、メステイソ、黒人、中国系に対する否定的な見方、あるいはアジアの諸国民やラテンアメリカの先住民は西洋文明と接触して再生しうるとの指摘は、西洋文明の比較優位を認める姿勢から脱却しておらず、一見多元主義と矛盾すると見える場合もある。また、先住民がプロレタリアートに転換することによって、社会主義に合流できるとの主張も統

合論の域を出ないと言えなくもない。おそらく、このようなマリアテギの思想における限界は、ペルーという環境と1920年代という時代的拘束の中で生まれたものである。このような問題点を確認しておくことは重要である。しかし、これらの矛盾に見える諸点に束縛されて、マリアテギの思想が有した歴史的な真価を見失ってはならないだろう。マリアテギの思想は、「統合」という言葉を用いることによって、共生・共存を論じていたことを確認しておかねばならない。そこには決して矛盾は存在しない。

マリアテギは少数者の白人層が多数者の先住民層を統合するのではなく、多数者である先住民層が少数者である非先住民層を融合するという視点の逆転を図るとともに、特権的集団と非抑圧的集団とが同時に存在する社会においては、個別的な帰属関係や経験を捨象して一般的観点を採用するように要求することは、既存の特権をさらに補強することに寄与するだけであるという近代社会における政治力学の逆転をも図ろうとした。マリアテギにとり、この一般的観点とは少数者のものであったとして、これを多数者のものに置き換えるのではなく、多様性を認めてゆく方向で力の転換を図ろうとしたのである。

現在、ペルーにおいて先住民文化を維持して生きる先住民は少数者になり、多数者はチョロと呼ばれる先住民系を出自とするにも拘らず先住民系文化とも白人クリオーリョ文化とも異なる大衆文化を形成している人々である。ペルー社会は、マリアテギが活躍した1920年代に比し変貌したが、文化的多様性の問題はより複雑になっており、マリアテギが示した多様性を認める方向性

がより求められている。そして、そのような多様性を認める方向性が、グローバル化のプロセスにおいて固有の文化とされる概念そのものが重層的に複合化してゆく中で求められている。

近代をルネサンス、宗教改革、新大陸への到達によって開始されたと捉えるよりも、より狭義に国民国家の時代と捉えるならば、ポストモダンとは国民国家が超越されてゆく時代であり、それはグローバル化の進展によって、国境が超越され、トランスナショナルなネットワークが支配的となる時代である。そして、ポストモダンの時代とは、少数者の排除を含む統合論ではなく、文化や価値観の多様性や多元主義が尊重されなければ成立しない共生・共存の時代である。この意味において、マリアテギがポストモダンに向けて文化や価値観の多様性や多元主義を重視する姿勢を先駆的に示していた

ことを、今日評価しておくことが必要である。

そこにこそ、先住民が多数を占めるペルーの現実の分析に発して、現在から志向されるポストモダンの時代に向けた共生・共存論を展開したマリアテギの思想の現代的意義があると考えられる。マリアテギの思想の積極的な評価は、主に社会主義を志向する人々によって行われてきた場合が多いことは確かである。しかし、マリアテギの思想の現代的な意味は、マリアテギ自身がマルクス主義は手段であって目的ではないと述べていたことを十分に考慮し、むしろマリアテギが目指したものを冷静に見極めることによってつかみ出しうるものと考えられる。マリアテギの政治的立場に拘泥する限り、その思想の幅と射程の長さを理解することはできないに違いない。

#### 参考文献

- Alarco, Luis Felipe y otros  
1995 *El Marxismo de José Carlos Mariátegui : Seminario efectuado el 2 de agosto de 1994*. Lima : Editora Amauta.
- Aricó, José  
1978 Introducción, In *Mariátegui y los Orígenes del Marxismo Latino-americano*, México : Siglo XXI, XI-LVI.  
1979 Mariátegui y la Formación del Partido Socialista. *Socialismo y Participación* No. 11 : 139-167.
- Baines, John M.  
1972 *Revolution in Peru : Mariátegui and the Myth*. Alabama : University of Alabama Press.
- Degras, Jane  
1977 『コミンテルン・ドキュメント第2巻』 荒畑寒村他訳, 現代思潮社。
- Fell, Claude  
1994 Vasconcelos-Mariátegui : Convergencias y Divergencias. In Rolando Forgues, ed., *Mariátegui : Una Verdad Actual Siempre Renovada*. Lima : Editora Amauta, pp. 53-70.
- Fernández Díaz, Osvaldo  
1994 *Mariátegui o la Experiencia del Otro*. Lima : Editora Amauta.
- Fernández Retamar, Roberto y otros  
1996 *Mariátegui en el Pensamiento Actual de Nuestra América*. Lima/La Habana :

- Editora Amauta/Casa de las Americas.
- Flores Galindo, Alberto  
 1978 Los Intelectuales y el Problema Nacional. In *7 Ensayos : 50 Años en la Historia*. Lima : Editora Amauta, pp. 139-156.  
 1980 *La Agonía de Mariátegui : la Polémica con la Komintern*. Lima : DESCO.  
 1987 Para Situar a Mariátegui. In Arianzen y otros, *Pensamiento Político Peruano*. Lima : DESCO, pp. 199-214.
- Forgues, Rolando  
 1994 Mariátegui y Peruanidad. In Forgues, ed., *Mariátegui : Una Verdad Actual Siempre Renovada*. Lima : Editora Amauta, pp. 87-106.  
 1995 *Mariátegui : la Utopía Realizable*. Lima : Editora Amauta.
- Franco, Carlos  
 1978 Sobre la Idea de Nación en Mariátegui. *Socialismo y Participación*. No. 11 : 191-208.  
 1991 Nación, Estado y Clases : Condiciones del Debate en los 80. In Carlos Franco ed., *Imágenes de la Sociedad Peruana : La "Otra" Modernidad*. Lima : CEDEP, pp. 17-42.
- García, José Uriel  
 1930 *El Nuevo Indio*. Cuzco : Editorial Rozas.
- Germaná, César  
 1977 La Polémica Haya-Mariátegui : Reforma o Revolución en el Perú. *Cuadernos de Sociedad y Política*, No. 2.  
 1995 *El "Socialismo Indo-americano" de José Carlos Mariátegui : Proyecto de Reconstrucción del Sentido Histórico de la Sociedad Peruana*. Lima : Editora Amauta.
- Goncharova, Titiana  
 1995 *La Creación Heroica de José Carlos Mariátegui*. Lima : Editora Amauta.
- 後藤雄介  
 1996 「ペルー・インディヘニスム再考：〈メスティサヘ〉の視点から」『ラテンアメリカ研究年報』16 : 34-59。  
 1997 『ラテンアメリカ「混血」論研究序説：統合と多元の狭間の〈メスティサヘ〉』一橋大学大学院博士課程修得論文。
- 原田金一郎  
 1980 「ペルーにおける共同体と社会主義」『インパクト』5 : 88-119。
- いいだもも (編訳)  
 1980 『民族・植民地問題と共産主義：コミンテルン全資料・解題』社会評論社。
- 国際労働運動研究所 (編)  
 1971 『コミンテルンと東方』国際関係研究所訳，協同産業出版部。
- Manrique, Nelson  
 1995 Mariátegui y el Problema de las Razas. In Gonzalo Portocarrero ed., *La Aventura de Mariátegui : Nuevas Perspectivas*. Lima : UCP, pp. 443-468.
- マリアテギ, ホセ・カルロス  
 1988 『ペルーの現実解釈のための七試論』原田金一郎訳，柘植書房。  
 1999 『インディアスと西洋の狭間で』辻豊治/小林致広訳，現代企画室。
- Mariátegui, Javier y otros  
 1991 *Encuentro Internacional : José Carlos Mariátegui y Europa : el Otro Aspecto del Descubrimiento*. Lima : Editora Amauta.
- Mariátegui, José Carlos  
 1975a *Ideología y Política*. Lima : Editora Amauta.  
 1975b *Temas de Nuestra America*. Lima : Editora Amauta.  
 1988 *Peruanicemos al Perú*. Lima : Editora Amauta.  
 1994 *Mariátegui Total : Edición Conmemorativa del Centenario de José Carlos Mariátegui*, Tomo II. Lima : Editora Amauta.
- Martínez de la Torre, Ricardo  
 1949 *Apuntes para Una Interpretación Marxista de la Historia Social del Perú*, Tomo II.

- Lima : Empresa Trabajo.
- Melgar Bao, Ricardo  
1995 *Mariátegui, Indoamérica y las Crisis Civilizatorias de Occidente*. Lima : Editora Amauta.
- Melis, Antonio  
1971 Mariátegui : Primer Marxista de América. In *Mariátegui : Tres Estudios*. Lima : Editora Amauta, pp. 9-49.
- Meseguer Illan, Diego  
1974 *José Carlos Mariátegui y Su Pensamiento Revolucionario*. Lima : IEP.
- Miroshevsky, V. M.  
1942 El 'Populismo' en el Perú : Papel de Mariátegui en la Historia del Pensamiento Social Latino-Americano. *Dialéctica*, No. 1. La Habana.
- Monereo, Manuel  
1994 *Mariátegui 1894-1994 : Encuentro Internacional. Un Marxismo para el Siglo XXI*, Madrid : Talasa Ediciones.
- Montoya, Rodrigo  
1990 Siete Tesis de Mariátegui sobre el Problema Etnico y el Socialismo en el Perú. In *Anuario Mariateguiano*. Lima : Editora Amauta, pp. 45-68.  
1992 *Al Borde del Naufragio : Democracia, Violencia y Problema Etnico en el Perú*. Lima : Casa de Estudios del Socialismo.
- Nugent, Guillermo,  
1987 Tradición y Modernidad en José Carlos Mariátegui. In Alberto Adrianzen, *Pensamiento Político Peruano*. Lima : DESCO, pp. 191-198.
- 小倉英敬  
1977 『マリアテギとペルー・ナショナルイズムの諸問題』 青山学院大学文学部史学科卒業論文。  
1996 「現代ペルーにおけるナショナル・アイデンティティ問題」『イベロアメリカ研究』 XVIII (1) : 43-60。  
1999 「1980年代アンデス・ユートピア論に関する一考察」『地域研究論集』 2 (1) : 117-140。  
2000 「20世紀初頭のペルーの思想状況：マリアテギと先行諸世代との思想的交流について」『イベロアメリカ研究』 XXI (2) : 61-82。
- Paris, Robert  
1978 El Marxismo de Mariátegui. In José Aricó ed., *Mariátegui y los Orígenes de Marxismo Latinoamericano*. México : Siglo XXI, pp. 119-144.
- Posada, Francisco  
1968 *Los Orígenes del Pensamiento Marxista en América*. La Habana : Casa de las Américas.
- Quijano, Anibal  
1981 *Reencuentro y Debate : Una Introducción a Mariátegui*. Lima : Mosca Azul.  
1994 Raza, Etnia y Nación en Mariátegui : Cuestiones Abiertas. In *Encuentro Internacional : José Carlos Mariátegui y Europa*. Lima : Editora Amauta, pp. 167-187.
- Rodríguez Pastor, Humberto  
1995 *José Carlos Mariátegui la Chira : Familia e Infancia*. Lima : Casa de Estudios del Socialismo.
- Rouillón, Guillermo  
1975 *La Creación Heróica de José Carlos Mariátegui*, Tomo I. Lima : Editorial Arica.  
1984 *La Creación Heróica de José Carlos Mariátegui*, Tomo II. Lima : Editorial ALFA.
- Salazar Bondy, Augusto  
1967 *Historia de las Ideas en el Perú Contemporáneo*. Lima : Editores Francisco Moncloa.
- Sobrevilla, David  
1980 Las Ideas en el Perú Contemporáneo. In *HISTORIA DEL PERU* vol. XI, Lima : Editorial Mejia Baca, pp. 113-415.
- スタヴェンハーゲン, ロドルフォ  
1949 『エスニック問題と国際社会』 加藤一夫監訳, 御茶ノ水書房。



Tapia, Rafael

- 1994 Mariátegui: Desarraigo y Peregrinaje, en Pos del Perú Andino Mestizo. In Gonzalo Portocarrero ed., *La Aventura de Mariátegui: Nuevas Perspectivas*. Lima: UCP, pp. 515-524.

友枝啓泰

- 1988 「ペルーのインディオと国民的アイデンティティ」『民族とは何か』岩波書店。

辻豊治

- 1983 「ペルーインディヘニスモの形成と展開：1920年代インディヘニスモ論争をめぐって」『ラテンアメリカ研究年報』3：82-105。

- 1999 『インディアスと西洋の狭間で』解説 現代企画室。

Vanden E., Harry

- 1975 *Mariátegui: Influencias en Su Formación Ideológica*. Lima: Editora Amauta.

山崎カオル

- 1975 「ホセ・カルロス・マリアテギの思想：ペルーにおける共同体とマルクス主義のある出会い」『国家論研究』6：1-13。

- 1981 「マリアテギと同時代のヨーロッパ思想」『思想』689：119-132。

吉見俊哉／姜尚中

- 1999 「混成化社会への挑戦：グローバル化のなかの公共空間をもとめて」『世界』662：148-170。